

『在宅医療の中で胃瘻を通して命の尊さを考える』

在宅医療クリニックゆめ 木田英也

病院勤務のときには消化器外科医として胃瘻などを造る立場でした。現在は在宅医療を行ない、胃瘻を含めた経管栄養の患者管理をしながら、看取りを含めた医療を行なっております。近年の日本の社会では身近なところで大切な家族の“死”を自分たちで看取ることが少なくなってきました。その中で在宅医療で見かけるのは、大きな病気がなく老衰のときを迎えて、老衰という状態を理解できず、大切な家族が食べることができないことを静かに見守ることができなくなっています。そこで、病院が勧める胃瘻について戸惑い、思い悩む症例が多く見られます。また、胃瘻管理についても、胃瘻を造ったことで生活の質が向上する症例もあれば、逆に様々な理由で自宅での生活ができなくなる症例もあります。在宅医療を行なっている中で看取りまでつなげていくのは、大切な家族への想い、そしてその家族との別れを考えていくことが大切です。消化器外科医のときには個々の倫理観に踏み込んで考えることはありませんでした。こうして考えると胃瘻が延命処置の一つとして行なわれていることがあると思います。小さな診療所の数少ない症例を例に出しながら、現在自分たちが抱えている問題点をこの研究会で伝えさせていただきたいと思います